

アルプスの麓に生きるチベット人

動乱から半世紀、いまスイスに

一九五九年三月、ダライ・ラマがチベットを脱出しインドに向かった。一〇万人以上におよぶチベット人が、あとを追った。チベット動乱から今年三月で五〇年。中国との溝は埋まらず、祖国と呼べる地を失った状態が続くいまを、スイスに亡命したチベット人たちの姿から見る。

近藤雄生

一九五九年三月一七日、チベッ

ト・ラサの離宮ノルプリンカ付近に

笑顔に宿る寂寥感

二発の砲弾が着弾した。その夜、ダラ

イ・ラマは兵士に扮してラサを出た。奇跡ともいわれたその脱出から五〇年となった今年三月は、昨年のような騒乱には至らずとも、爆破事件や、僧侶らによる警察署襲撃があったと報道された。ダライ・ラマは昨年一月、「中国政府との対話は失敗」と自ら認め、チベット人の間では、独立を望む声が強まっているともいわれる。チベット人にとって状況は何も好転しておらず、祖国と呼べる地がない状態は、半世紀が経ったいまも変わっていない。

昨年三月の騒乱以来、チベットが抱える問題を見つめながら、心から祖国と思える地がないとはどういうことなのか、と考えていた。そんなときにスイスで複数のチベット人に出会った。全くの異文化の中で暮らす彼ら亡命チベット人から、その一端を見たいと思った。

スイス中部のトゥーンという町で、若いチベット人女性・ドルマ（仮名）に会った。一八歳だという彼女は、ときにそれより上にも、また若くも見えた。彼女がスイスに来たのは二〇〇六年のことだという。「スイスでの生活は本当に夢のようです。山もあってチベットに似てるし、それに自由だし……」

すでにスイスに亡命していた父親に呼び寄せられ、彼女はチベットからインドを経てスイスに亡命できたといった。チベットからは一カ月以上かけてヒマラヤを越えた。標高五〇〇〇メートルほどになる険しい山道を、わずかな食料を持ち、警察から姿を隠しながら歩いた。

緑に満ちた静かな川べりでそんな過酷な逃避行の様子を話しながらも、後ろに広がるアルプスを眺め、ときに春の花のような明るい笑顔を覗か

せた。しかし、こうも言った。

「スイス人は……、本当のことを言ううと、あんまり好きになれないんです。友だちもほとんどいません。彼氏にするにしても、やっぱり黒髪のアジア人がいいなあ」

故郷を捨てて異国で暮らすことを決めた彼女の孤独さも垣間見えた。そのうち、話にどこか不明瞭な点があるのを感じた。インドからどうやってスイスに来たのかについて詳しく尋ねると話が二転三転する。それ以上はあえて尋ねはしなかったが、何かいえないことがあるようだった。そして写真を撮らせてほしいという

と、彼女は少し申し訳なきように、こう言った。

「個人を特定できるようなことは書かないでほしいんです。父からそう言われました」

「亡命」から「憧れ」へ

スイスに最初のチベット人が来たのは一九六〇年代に遡る。チベット

ラマが暮らすインドへ行くこ

とを夢見る。そしてインドに

くれば、豊かな西洋社会を夢

見るものだ」

チベットのある哲人が若い

世代についてそのように話し

ているが、スイスは、そんな

若者たちの目的地となり続け

てきた。

だがそれは、チベット人た

消えぬ望郷の想い

ドルマは最後に会ったとき、

スイスに来た経緯について嘘

をついていたことを私に謝った。

「こないだはスイス人の友だ

ちも一緒だったから、本当の

ことは怖くて言えなかったの」



高僧ゴンサール・リンポチェは、レマン湖を絶頂に望めるスイス南部の小高い丘モンベルランにあるチベット仏教の施設で、仏教を説き続ける。1959年にチベットを脱出し、インドで修行を続けたのち、75年、師匠とともにスイスに来た。



スイスのチベット亡命政府で長年働いたドルジー。ここはスイス北部リコンの僧院の中だが、同じ建物の中に彼が働いた亡命政府の小さなオフィスがあった。

からインドに渡ったものの慣れない気候や生活に苦しむチベット人に、スイスが手を差し伸べたのが始まりだった。そのころスイスに来たのは、五九年にダライ・ラマとともにチベットを脱出した人がほとんどで、たとえば、来年六〇歳となるドルジーもその一人だ。

ドルジーはインドで学んだあと、亡命政府の役人として七四年にスイスに派遣され、すでに三〇年以上この国に暮らしている。

「チベットを脱出したとき、私はまだ九歳ぐらいでした。家族が村の富裕層だったから逃げなければならなかったんです。ダライ・ラマ法王もすでにチベットを脱出したらしいというのを聞いて、私たちも森の中を歩き、木を切り、川を渡って進みました」

スイス北部リコンにあるチベット仏教の僧院で、彼はそう話した。半世紀前、また雪の残る四月ごろ、一〇万人以上がそのようにしてイン

ドへ渡った。

ドルジーがスイスで暮らした三〇年の間に、この地のチベット人は増え続けた。いまでは三〇〇〇人ほどがスイスで生活する。その数はインド、米国などに次ぎ、欧州では最多となった。

しかし、みながみな、「難民」として堂々とスイスにきたわけではない。入管業務にかかわったことのあるチベット人によれば、難民としての資格がなくとも、豊かな西洋で暮らす

ために、法律の網の目をくぐり抜け

て潜り込んできた者がおそらく全体の三割近くにおよぶという。近年に

やってきた若者に限って言えば、その割合はぐっと増えるはずだ。

ドルマだけでなく、チューリッヒで話した複数の若いチベット人もみな、入国した詳しい経緯については口をつぐんだ。明らかにドルジーら

五九年の脱出組とは異質の「亡命者」であることは違いなかった。

「チベットにいるときは、ダライ・

ラマが暮らすインドへ行くこ

とを夢見る。そしてインドに

くれば、豊かな西洋社会を夢

見るものだ」

チベットのある哲人が若い

消えぬ望郷の想い

ドルマは最後に会ったとき、

スイスに来た経緯について嘘

をついていたことを私に謝った。

「こないだはスイス人の友だ

ちも一緒だったから、本当の

ことは怖くて言えなかったの」

大変な生活が待っているとしても……」

豊かさや自由を求め、故郷やインドでの生活を捨てて新たな国へ「亡命」することは、彼らの選択である

には違いない。しかし、それは容易な決断ではなかったはずだ。その決断の重さは、祖国で平穏に暮らせる自分には決して分りえないことのように思えた。

……

……



若いチベット人で写真撮影を許可してもらったのは彼だけだった。チューリッヒにて。彼はチベットからネパールに逃れ、ネパールで僧侶となり、そのあとスイスへ来た。